

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

# 地域づくりinほくりく

2013 AUTUMN



「立山初冠雪」

絵 田原 忠男

## ❖ 随 想

中島 太郎(新潟県立歴史博物館 館長)

「かたみとてなにか残さん…」

【自然と文化の多様性】モニュメントを!

2

## ❖ 特別企画

「『護天涯』への思いをひとつに

～立山砂防を支える人々～」

北陸地方整備局 立山砂防事務所

4

## ❖ 特集「地域とともに」

「妖怪を知り、新潟を楽しむ」

(新潟妖怪研究所)

10

## ❖ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

ワインが発信する新潟の魅力(ワイナリーフェルミエ)  
(新潟県新潟市西蒲区)

12

## ❖ 北陸再発見

先人の知恵から生まれた富山の昆布メ

(富山県魚津市)

14

## ❖ 伝言板

16

## かたみとてなにか残さん・・・【自然と文化の多様性】モニュメントを！

なかじま たろう  
中島 太郎

新潟県立歴史博物館館長  
一般社団法人 地域ルネッサンス創造機構  
【シンクタンク・ザ・リバーバンク】 執理事務補佐



1947年長岡市生まれ。1969年慶応義塾大学文学部西洋史学科卒。同年、株式会社文藝春秋入社、雑誌の広告部門・編集部門を交互に半々くらい担当。雑誌の創廃刊に数多く携わる。1988年やまなか食品工業株式会社の経営者に就任。2002年同会社を整理。2003年東京の出版企画会社で、出版と経営のアドヴァイスを行う。2004年財団法人神奈川中小企業センターで新事業関連の調査を行う。2005年からフリー。2007年から非常勤の現職＝新潟県立歴史博物館館長。行政の諮問委員、新聞・テレビ・ラジオ等の投稿・解説、出版物の企画編集制作及びイベントの企画運営、講演等多数。

### 大河・信濃川だからこそその大花火

このところ、年々盛大になり観客が増えている「長岡大花火」。その魅力は、地方ならではの広く澄んだ空・漆黒の闇が、光の効果を倍加させていると同時に、ずしんと響く大玉（尺玉）中心の大きな花火の迫力にある。それは、とりもなおさず、幅1キロ弱にも及ぶ広大な信濃川の河川環境のおかげといえる。とりわけ中越地震の直後から打ち上げられている“フェニックス”は、川の上流から下流まで1.6キロ（時には2キロ）の横幅で打ち上げられ、土手の観客は天空を見上げた上に、その首を左右に目いっぱい大きく振らないと、花火全体を視界に入れることができないくらい大きい。まさに、日本一の大花火である。



【復興祈願花火フェニックス】  
黄金の不死鳥が連なって舞い上がる開花幅2.8kmにも及ぶ超ワイドスターメイン  
(出典：長岡市商工部観光企画課「長岡市デジタル写真館」)

平成4年（1992）に“讚えよう 大切な価値を 川を自然を 心の金メダルにして”というキャッチフレーズのもと、立ち上げた「しなの川音楽祭」は、この信濃川が育んだ長岡大花火をテーマにしてスタートした。長岡の花火師・嘉瀬誠次さんを表彰し、初めて「秋」に（今でも秋にはこれっきり）三尺玉を打ち上げた。

それから10年間、地域に環境共生という意識の種をまき、市民のパワーあふれる企画・行動の先駆けとなった。そして、私たちは人々に、川が人間の基本的生存要件である水・食糧・エネルギーを供給し、交通の要でもあり、また数多くの生物の遥蘭の地であることに気付いてもらおうと、力を注いだ。

### 危ぶまれる地球の持続可能性

その後10年の間、休止していた「音楽祭」の精神と遺産を引き継いで、活動を再開しようということになった。キッカケは、平成20年（2008）のリーマンショックである。アメリカ型の“強欲資本主義”がついに破綻した、と私たちは直感したのだ。

壮大な自然のシステム（エコロジーシステム）に、人間が後から付け加えた経済システム（エコノミーシステム）が寄り添い、両システムの相克を乗り越えるべく努力はしているものの、

世界の人口が70億を超え、野放図なエネルギーの消費、マネーの暴走・金融の自己増殖などにより、自然の食物連鎖・自然循環系も人間の購買連鎖・物質循環系もともにその持続可能性が限りなく不可能に近づき、宇宙船地球号は、より快適に過ごしたいという人間の意図に反し、壊れつつあると、明確に意識した。

私たちは、ふたたび立ち上がる決意をした。今こそ、文明のコペルニクス的転換をし、「命」のそして「循環」の哲学を取り戻さなければならない。地球の破滅的状况を認識しながら、物事を本質的に掴まえつつ、自らの周辺を少しづつでも変えていく作業を、改めて始めようと思った。そして、【シンクタンク】を立ち上げた。「しなの川音楽祭」の精神と遺産を引き継いで、自立・自制・慈愛に満ち、絆と調和を大切にす自己形成を果たしつつ、シンクタンクという形で、新たな地域貢献をしよう・・・。

### GNH という哲学との出会い

出会いというものは不思議なもので、立ち上げの時期である今年の6月より1年ほど前から、元世界銀行副総裁の西水美恵子さんと何度かお目にかかるうち、私たちがかねてから興味を抱いていた、ブータン第4代ジグメ・センゲ・ワンチュク国王の提唱するGNH = Gross National Happiness (国民総幸福量) について、西水さんがその信奉者であり、それどころか同国王を尊敬され、特別懇意にされていることを知った。私たちは僭越にも西水さんに、これから立ち上げる海のものとも山のものとも分からない組織のパートナーをお願いし、快諾を得た。

GNHの4つの柱、「持続可能で公平な社会経済開発」「ヒマラヤの自然環境保護」「有形・無形文化財の保護と推進」「良い統治」、もっと詳しく言えば9項目にわたる理念を、私たちの地域にあてはめながら、その概念の実現に生活者の視点で知恵を出し合い、さまざまな活動をすべく、スタートした。幸い、昨年年末には法人化

を果たし、一般社団法人 地域ルネッサンス創造機構【シンクタンク・ザ・リバーバンク】は、東京事業部も含め、ダッシュしつつある。「水も土も汚さない“おふとん農法”」「長岡が生んだ武士の娘・杉本鉞子の顕彰」「全人格教育機関・新崇徳館のスタート」「地域発の吊るし雛まつり」など、環境・文化・教育・地域活力・・・などなど多彩に活動を展開中である。

### 川に学び、自然と文化の多様性を守る

日本という経済的に成熟した社会に住む私たちは、集権的縦社会の論理や志向を離れ、自発的精神による自己組織化を促して、自らがGNHを体現させなければならないと自覚し、その覚性的責任において、世界をリードするのだという決意さえ抱きながら、小さくとも質の高い活動を目指している。

「しなの川音楽祭」のためだけに、わざわざアフリカのモザンビークから駆け付けた、ライフサイエンティスト、故・ライアルワトソン博士が言い残した言葉「川はすべてだ！信濃川を神殿とせよ」を反芻しながら、世界の4大文明のみならず、はるか縄文時代から河川のそばに人間が寄り添い生きてきたことを思い、いつか、【自然と文化の多様性】を担保している川を讃美する《モニュメント》を建てたいと密かに思っている。



(一社) 地域ルネッサンス創造機構の季刊誌「リバーバンクレポート」

# 『護天涯』への思いをひとつに ～立山砂防を支える人々～

北陸地方整備局 立山砂防事務所

## 1. はじめに

富山県東部の立山連峰に源を発し富山湾に流入する常願寺川は、日本有数の急流河川として知られる。上流域には脆弱な地質が広範囲に分布し、年間降水量4,000mmを超過する気象条件と相まって、土砂流出が盛んで下流域に幾多の土砂災害をもたらしてきた。また、常願寺川源流域には、かつて活発に活動した「立山火山」があった。火山活動が落ち着いたのち、風化しやすい火山噴出物が長期間の侵食作用を受け、形成されたのが立山カルデラである。

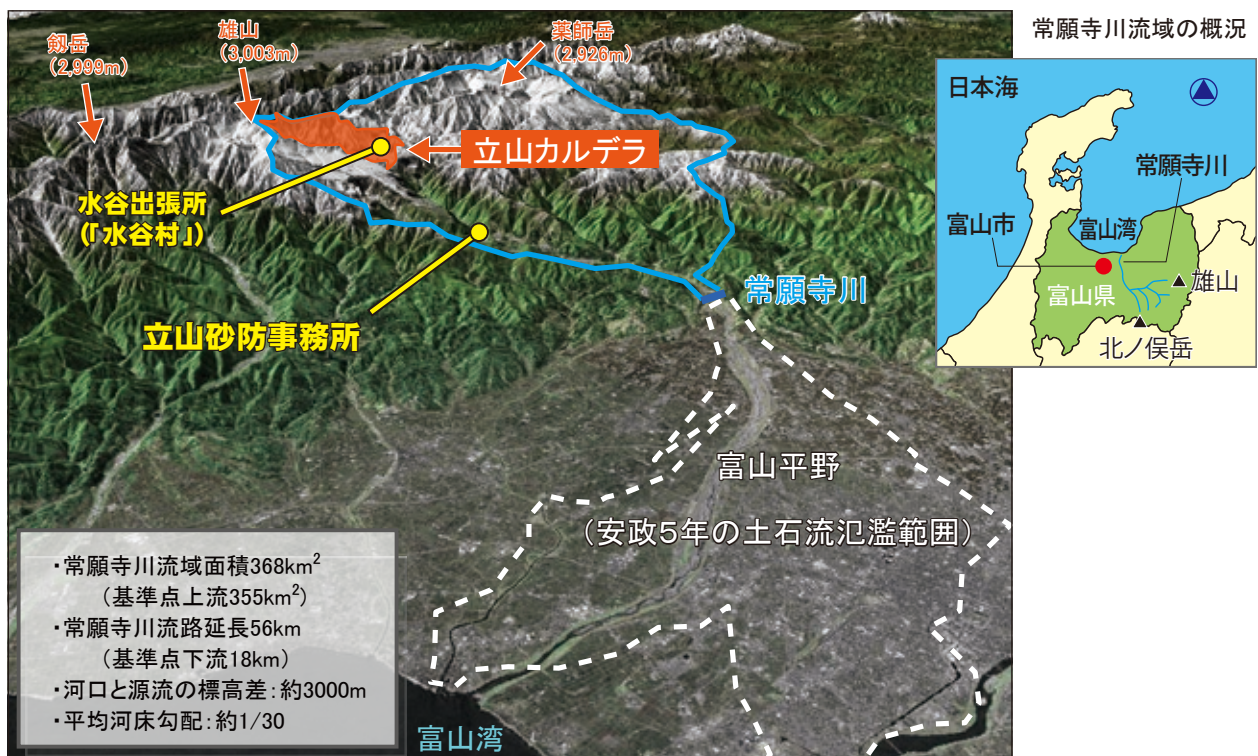
1858（安政5）年 北陸地域を大地震が襲い、立山連峰の一つである鷲山が大規模に崩壊し、その崩壊土砂により湯川、真川の上流域に天然ダムが形成された。その後、天然ダム決壊により2度にわたって富山平野を大規模な土石流が襲い、甚大な被害が発生した。こののち、常願寺川は降雨や融雪のたびに土砂を下流に流出させる急流河川であったが、「暴れ川」へと変貌

した。立山カルデラ内には、今なお不安定な状態で大量の土砂が堆積している。

この不安定土砂が、洪水とともに大量に流出する現象が起きれば洪水氾濫の恐れが高まる。

洪水氾濫シミュレーションによれば、氾濫した洪水流は、富山県庁、市役所、富山駅が位置する中心市街地まで流れ込み、鉄道や国道などの重要交通網も被災を受ける甚大な災害が発生し、富山県のみならず広範囲にわたって社会経済に大きな影響を及ぼすことが予測される。

立山カルデラ内の砂防事業の必要性は理解されていたものの、現地の施工条件の厳しさから着手は先送りされた。1891（明治24）年にヨハネス・デ・レイケにより立案された常願寺川改修計画においても下流河川改修が優先されている。デ・レイケは上流域を調査したうえで「崩壊地の処理は手のほどこしようがない」と述べている。



立山カルデラでの砂防事業が富山県により開始されたのは、1906（明治39）年のことであり、国の補助事業として湯川谷、泥谷、多枝原谷の砂防工事に着手している。

泥谷の砂防堰堤に彫り込まれた『護天涯』の文字は、第14代富山県知事浜田恒之介の揮毫したものと言われ、遠く人里離れた空の果てで、下流域を守るための砂防に取り組んだ先人の気概が伝わってくる。その後、1926（大正15）年に砂防事業は直轄化されたが、今なお立山カルデラの砂防工事は「護天涯」と称されている。



「護天涯」の碑（立山カルデラ内 泥谷）

## 2. 立山砂防を支える人々

### (1) 砂防工事現場

立山カルデラの砂防工事は、高標高部にあり積雪期の施工は困難である。工期は6月から10月までの5ヶ月間に限定される。また、富山市中心部から2時間以上のアクセス時間が必要となり、砂防工事関係者の多くは、立山カルデラ内の水谷平での合宿生活を余儀なくされる。

砂防工事専用軌道で必要な資機材や食材を搬送しながら、多いときには400名に上る関係者が寝食を共にする地図にない期間限定の「水谷村」が毎年出現する。宿舎はプレハブ

形式で、工事着手時に組み立てられ、工事終了とともに解体される。若年から中高年まで様々な年齢層の男性に、賄いや看護を担当する女性も加えた、村民の合い言葉は「下山まで無事故で頑張ろう」である。



「水谷村」の全景

工事を実際に現場で仕切る監理技術者や現場代理人は、過年度の経験者が多い。ある建設会社のオーナーが「立山砂防の仕事は慣れた者でないと任せられない」と語るほど、厳しい施工環境にあることがその理由の一つである。

### 【カルデラ内の砂防工事】

#### ①崩壊斜面に緑を復元する山腹工事



一方で、現場を任せられた技術者は、立山砂防の仕事にやりがいを感じながら作業を着実に進めている。昨年、現地を視察した羽田前国土交通大臣も「現場が富山平野を守るという気概を持ってやっていた」と感想を述べられた。立山砂防の現場を訪れた視察者の多くは、黙々と現場で作業する工事関係者の姿に心からの敬意を表して現場を後にする。

#### 【カルデラ内の砂防工事】

##### ②無人化施工技術を導入した崩落斜面直下の工事



## (2) 砂防工事専用軌道

立山砂防事務所のある立山町千寿ヶ原から立山カルデラの前線基地である水谷平までのアクセスは2ルートが確保されている。第1のルートは常願寺川沿いに敷設された砂防工事専用軌道であり、第2のルートが有峰林道を経由するルートである。いずれのルートも豪雨時等には事前通行止めの措置が講じられるほどで、落石や土砂崩落の危険性が高い。

昭和4年に樺平までの完成をみた砂防工事専用軌道は、昭和40年になってようやく水谷平まで全線18kmが開通し現在に至っている。千寿ヶ原から水谷平までの所要時間は1時間

45分である。18の橋梁と12のトンネルが存在し、このうち3橋梁については、雪崩対策として、春先に上部工を架設し、晩秋に撤去する作業を毎年繰り返している。また、合わせて38段のスイッチバックが存在し、特に樺平（高低差約200m）には連続18段のスイッチバックがある。

この砂防工事専用軌道は、多くの関係者の尽力で今日も作業員や資機材を輸送する重責を担っている。春の訪れとともに千寿ヶ原から軌道敷地の除雪が開始され、水谷平までの開通に向けた作業が開始される。雪崩常襲地帯での橋梁の架設及び枕木・レールの設置、危険箇所での落石防護ネットの設置、沿線標識の設置、スイッチバックポイントの自動設備の設置、さらには全区間の落石・崩土・落葉の除去と作業は多岐にわたり、多大な労力を要する。また、軌道運行中においても、レール・枕木の交換、落石・崩土の除去、ポイントの清掃・給油等安全運行を確保するために日々の管理作業が継続される。

一方、運行管理にも並々ならぬ労力がかけられている。列車の運行は朝一番の巡視に始まり、運転手と車掌、巡視員2名の4名が担当する。落石や倒木、路肩の崩れ、レールの損傷の有無に加え、山側法面のチェック、スイッチバックポイント自動設備の作動確認も欠かせない。スイッチバック箇所では、トロコの進行方向が逆になる。前方障害物をいち早く発見して運転手に知らせる車掌の役割は、極めて重要である。

さらに、千寿ヶ原から水谷までに5箇所の連絡所が設けられている。中小屋、桑谷、鬼ヶ城、樺平、水谷には「かあちゃん駅長」が、列車運行に欠かせない情報のやりとりを追われる。平常時は、通行可能を示す緑の旗を振って笑顔で迎えてくれているが、豪雨時や予定

時刻に列車が到着しない場合等には緊張感に包まれる時もある。



砂防工事専用軌道・樺平連絡所

### (3) 工事現場以外の応援団

#### ①立山カルデラ砂防博物館

立山砂防事務所に隣接して「立山カルデラ砂防博物館」が開館したのは平成10年6月である。立山・黒部アルペンルートに隣接する立山カルデラでの砂防について、社会に広く紹介し、防災に役立てることを目的として富山県が開設した。



立山カルデラ砂防博物館

「知られざるもう一つの立山」をメインテーマとし、屋内博物館と野外博物館（すなわち現地体験学習）をセットにした運営方針のもと、年間約5万人の来館者を迎えている。館長の今井清隆氏、副館長の中村貞敏氏は来館

者に対し、立山カルデラの概況、かつての富山平野の土砂災害、砂防施設の効果などをわかりやすく丁寧に語りかけている。

また、年間2,000人を対象として、立山カルデラ砂防体験学習会を主催・運営し、全国から訪れる大勢の参加者が立山砂防や防災についての理解を深めている。

#### ②立山砂防女性サロンの会

立山砂防を応援する女性組織として「立山砂防女性サロンの会」が結成されたのは平成13年のことである。会の活動目的には、『土砂災害の恐ろしさと、砂防により生命財産が守られている』ことを語り広める」と明記されている。現在の会員数は300名を超え、アドバイザーの吉友嘉久子氏、会長の尾畑納子氏らを中心に活動が展開されている。

会の活動は国内にとどまらず、毎年海外の治水砂防に縁のある土地を訪ねている。平成16年以降、ネパール、韓国、イタリア、スイス、カナダ、ニュージーランド、インドネシア、オランダ・ベルギー、台湾、ベトナムと毎年訪問国を増やしている。

女性の目線で防災の語り部として、他地域での見聞も含め立山砂防についての講演会等が開催されている。



【立山砂防女性サロンの会の活動】  
女性サロンの会主催の砂防講演会  
講師は吉友嘉久子アドバイザー

### ③立山砂防スペシャルエンジニア

立山砂防スペシャルエンジニアは、土砂災害の防止、災害復旧等に関するボランティア活動を行うことを目的として、平成9年に建設省（現国土交通省）OB職員により結成された団体である。

特色ある取り組みとしては、立山カルデラ砂防体験学習会の案内役がある。自らの体験等も盛り込みながら、立山砂防を詳しく紹介し参加者の理解を深めている。

平成25年からは立山・神通砂防スペシャルエンジニアとして再編され、顧問の河村忠次氏、代表の川田孝信氏、事務局長の松本清則氏らを中心に活動が展開されている。



【立山砂防スペシャルエンジニアの活動】  
スペシャルエンジニアを講師とした現地検討会  
講師は河村忠次 顧問

## 3. 最近の話題

### (1) 文化財への登録

近年、歴史ある立山砂防の施設を文化財に登録していく動きが顕著になっている。文化財への登録に関しては、地元自治体からの文化庁等への働きかけが重要であり、富山県を中心に積極的な取り組みがなされている。

#### ①白岩砂防堰堤の重要文化財指定

立山カルデラの下流端に位置する常願寺川における砂防の要の施設であり、本堤、副堤、導流堤等が一体となった複合構造で、日本一

の高さ（63m）を誇る施設として昭和14年に完成した。平成21年6月に砂防施設としては全国で初めて重要文化財に指定されている。



白岩砂防堰堤（砂防初の重要文化財）

#### ②本宮砂防堰堤の登録有形文化財指定

常願寺川中流域において上流からの流出土砂を貯砂・調節することを目的に昭和12年に完成した。貯砂量500万m<sup>3</sup>は日本最大規模である。平成11年9月に登録有形文化財に指定されている。

現在、富山県では、本宮砂防堰堤を重要文化財に指定すべく、その要件整理等を進めている。



本宮砂防堰堤（登録有形文化財）

#### ③立山砂防工事専用軌道の登録記念物指定

立山砂防工事専用軌道については、国の直轄着手以降立山カルデラへの資材運搬を担っ



ているという歴史的な性格が評価され、平成18年7月に登録記念物に指定されている。

## (2) 富山県における世界文化遺産登録を

### めざした動き

平成18年に文化庁が世界遺産暫定一覧表の追加記載の資産について、地方からの提案制度を制定したことを受け、平成19年に「立山・黒部～防災大国日本のモデルー信仰・砂防・発電～」が富山県知事より文化庁長官あてに提出された。

その後、文化審議会世界文化遺産特別委員会の審議により、自然災害から暮らしを守り続けてきた人間の営為を刻む諸要素が特定地域に集中する資産としては価値が高いとの評価を得て、指摘された課題に対する整理を急ぐとともに、世界文化遺産の候補として内外へのアピール行動が活発化している。

平成21年から3年間は「国際砂防フォーラム」が富山で開催され、国外の有識者も含めてシンポジウムが開催された。

さらに平成24年には「世界遺産フォーラム」が東京で開催され、600名を超過する参加者が全国から集まった。石井富山県知事が立山砂防の文化的価値について詳細に紹介し、立山砂防に対する熱い思いを伝えた。

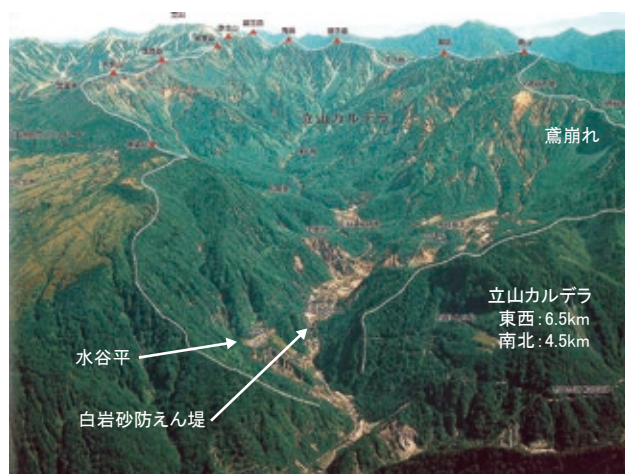
本年9月29日には「世界遺産登録推進シンポジウム」が富山で開催される。出演予定者には、以前から立山・黒部の世界文化遺産登録に支援をいただいていた文化庁長官・青柳正規氏、国連の世界遺産関連の諮問機関であるイコモス副会長のアルフレッド・ルイス・コンティ氏が名を連ねている。事前には立山カルデラの砂防事業の事前視察も予定されているところである。

## 4. おわりに

安政の大地震から1世紀半が過ぎて、今なお立山カルデラでは土砂崩壊が続いている。平成23年8月には2度にわたり崩壊が有峰二の谷で発生した。また平成25年春先にはカルデラ下流の砂防工事専用軌道鬼ヶ城トンネル付近で、高さ約100mから直径5mを超える巨石が軌道を直撃した。いずれも人命には影響がなかったものの、自然の猛威をまざまざと見せつけた。このような危険と背中合わせの現場であるが、大勢の人々の尽力によって今日でも富山平野の安全を確保するための砂防工事が続けられている。

また、応援団として立山砂防を支えていただいている人々には、各々の組織の特色やこれまでに蓄積された経験を活かして、立山砂防あるいは防災に関する情報の配信に尽力いただいている。関係各位の取り組みのおかげもあり、立山砂防について様々な方面から関心が高まっている。

これからも立山砂防事務所は、関係各位のご理解とご協力をいただきながら、富山平野の安全・安心に寄与する「護天涯」の工事を進めるとともに、立山砂防の技術・文化等を後世に伝承して参ります。今後ともご支援をよろしくお願ひします。



# 特集「地域とともに」

## 「妖怪を知り、新潟を楽しむ」

### ■ 新潟は妖怪の宝庫

「ちょっと怖い。だけど、なぜかなつかしきを感じる妖怪の存在を、まず皆さんに知ってもらいたいと思い、かわいいイラストを添えて紹介しました」と語る高橋 郁丸たかはし ふみまるさんは、新聞連載していた「妖怪にいがた」に新潟県内市町村の妖怪紹介を加え、「新潟の妖怪」（平成22年10月）を出版した。

新潟県民俗学会常任理事でもある高橋さん。学生時代から民俗学に興味を持ち、県内各地を訪ね歩き研究を続け、中でも生き生きと語り継がれてきた妖怪の魅力にすっかり心を奪われてしまったようだ。

新潟には数多くの妖怪が存在し、その数は全国一といわれる「妖怪の宝庫」であるにも関わらず、その認知度が低いことが分かった。

「妖怪というと、漫画や絵本の中に登場するものと思われがちだが、妖怪伝説は地域の歴史、文化が語られている」。つまり、「妖怪を知ることとは地域を知ること。妖怪は文化だ」という熱い想いがわきあがり、自らが中心となり「新潟妖怪研究所」を立ち上げることになった。

その情熱は「新潟の妖怪」出版記念パーティに参加した人々の心を揺り動かし、一気に新潟妖怪研究所の設立へと突き進み、平成24年7月に開催された設立総会には、民俗学にとどまらず、各界各層から駆けつけた116名（現会員数は260名）が集まり、妖怪に親しみながら、妖怪を研究し、新潟の文化を普及し交流する活動を応援することが誓われた。

### ■ 今なぜ妖怪か

妖怪は人々の不安の象徴だったと考えられる。新潟は昔から自然が豊かな反面、災害も多く、自然への恐れから数多くの妖怪伝説が残り、



漫画家でもある高橋さんのイラストで県内の妖怪や伝説を紹介

「吹雪の夜には言うことを聞かない子どもをさらって食べる鬼婆『ヤサブロウバサ』が飛んでくる」「大蛇が暴れると洪水になる」など新潟の風土の中で語り継がれてきた。

妖怪は土地の歴史や自然環境に加え、妖怪を感じる心から、さまざまな妖怪が生まれ、土地の歴史とともに伝えられてきた。

しかし、妖怪たちは今、社会環境の変化から家庭や社会に登場することもなくなり。急速に生活の場から離れていき、物語の中に閉じ込められ、その存在感が多くの人々から薄れてきている。

高橋さんは、「妖怪を再認識することは、地域の宝である伝承文化の掘り起こしにつながり、言い伝えられてきた「妖怪」は、その土地の景観や街並みなどの保存活動から掘り起こされ、歴史と共に伝えられる。」と話し、さらに「高齢者から話を聞くことで、子どもたちは自然現象への畏怖の念や妖怪が生まれた背景が想像できる豊かな感性が養われる」。「伝承が途切れてしまわないように、まず日常生活の中で妖怪たちと出会う「場」を創り出す必要がある」と力説する。

### ■ 「日本一短い」から情報発信

妖怪漫画家水木しげるさんの出身地、鳥取県境港市の「水木ロード」、酒吞童子の終焉の地となった京都府福知山市大江町の「世界鬼学会」など、全国で「妖怪」を主役にしたまちづくりが功を奏し、活況を呈している。



長さ11m「日本一短い妖怪ストリート」除幕式

新潟妖怪研究所は、まず妖怪を知ってもらい、新潟の妖怪の普及に力を入れようと、去年は「新潟の妖怪3回連続講座」「新潟の妖怪と出会う旅」を企画し、「楽しい!」「わくわくする!」と話題になり、好評を得た。

今年度は、情報発信の拠点を作ろうと「日本一短い妖怪ストリート」と銘打って、新潟市中央区の西堀6番館「ナジーラ」前に延長11mの妖怪ストリートをオープンさせることにした。

多くの仲間が集まり、ストリートのコンテンツを検討し、研究所のイメージキャラクターを「火の玉ちゃん」。また「火の玉ちゃん」のお菓子を商品化することを決定した。

さらには、新潟の民芸品、三角達磨を模した妖怪グッズ「妖怪三角だるま」に絵づけをする教室を開催し、子どもたちが楽しみながら妖怪を学んでもらうなども決め、妖怪話が盛り上がる夏のオープンに向け準備が進められた。

8月3日、午後7時、妖怪のお面をつけた高橋さんが除幕すると、ウインドーに「大眼<sup>\*1</sup>」、「油なせ<sup>\*2</sup>」、「火車<sup>\*3</sup>」などの妖怪が現れ、同日行われた千灯まつりにあわせ、人情横丁に並べられた「妖怪灯籠」は、妖怪が暗闇に飛び出し何か語りかけてくるようで、行き交う人々が立ち止まり写真を撮る姿が見られた。

\*1: 12月7日の夜現れ悪い子をさらう。  
 \*2: 油を粗末に使うと現れ「油なせ（油を返せ）」と言う。  
 \*3: 北越雪譜に登場する猫の妖怪。葬式や墓場から死体を奪う。

## ■ 活性化の鍵は「楽しさ」

高橋さんの話す妖怪を子どもたちは夢中になって聞き、さまざまな質問が出るそうだ。

妖怪イメージを膨らませた後、子どもたちが絵づけをした「妖怪三角だるま」は、妖怪ストリートのウインドーに飾られている。

夏休みの間、妖怪ストリートは「妖怪顔出し看板」と写真を撮り、絵づけを楽しむ子どもたちの声が響き賑わった。

「妖怪顔出し看板」は、子どもだけでなく道行く人に大変な人気で、近々もう1台設置される予定だ。

秋には、古町での「妖怪探し」、冬には「妖怪クリスマスツリー」の設置など、わくわく、ドキドキする企画が予定されている。

「子ども、大人、観光客、それぞれ楽しみながら妖怪を学べる企画を考え、妖怪たちといっしょに古町をそして地域を盛り上げて行きたい」と高橋さんは眼を輝かせていた。



絵づけに取り組む子どもたち



1. 妖怪灯籠  
 2. イメージキャラクター  
 火の玉ちゃん  
 3. 火の玉くず餅



妖怪顔出し看板

### 「新潟妖怪研究所」

新潟県新潟市中央区万代3-4-14  
 TEL: 025-255-1388  
 facebook <https://ja-jp.facebook.com/niiगतayoukailabo>

この事業は、一般社団法人北陸地域づくり協会が行っている「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業の平成25年度対象事業です。

## シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

### ワインが発信する新潟の魅力（ワイナリーフェルミエ）

新潟市中心部から車で約30分、潮風に吹かれ、目的地のワイナリーに到着する。あたりは一変、建物の周りには手入れされた芝生、季節の花が咲き乱れる庭があり、その横には収穫間近のぶどう畑が広がる。周りを歩くと、同じように個性豊かなワイナリーや関連施設が点在している。

新潟市西蒲区角田浜にある「カーブドッチ」の「ワイナリー経営塾」で学び、2006年、同じ丘陵地に「フェルミエ」をオープンした本多孝さん(46)から、新潟でのワインづくりへの想いを伺った。



収穫間近のぶどう



ワインの発酵状態を確認する本多さん



角田山の麓に広がるぶどう畑での収穫風景

#### ■ 土地、気候、ヴィンテージ（年）、

##### 生産者によって異なるワインの味わい

「日本酒は毎年、全国規模の品評会が開かれ、優劣が競われるが、欧州には国内コンクールでワインの味わいを競うという風習はない。ワインは本来、コンクールで競うべきものではないと思う」と日本酒との違いにふれ「いろいろなワインを飲むうちに同じ品種でも、土壌や気候、生産者や年によって異なる味わいに仕上がることに興味を持つようになり、次第にワインの背景にある風土や文化などまでに想いが巡り、その土地の香りを映し出すワインの個性を楽しむようになった」と話す本多さん。

30代半ばにそんなワインの魅力にすっかりとりつかれ、故郷新潟で自分もワインをつくりたいという想いを強く持つようになった。

「幸い妻も賛成してくれ、夫婦いっしょに『ワイナリー経営塾』で学ぶことができた」と証券会社を辞め、新潟に戻った当時を振り返り、「周りの理解、学ぶ場、ワイナリーをオープンする資金の応援などのいろいろな条件がうまく重なり、この道へ踏み出すことができた」と語る。

#### ■ テロワール\*を表現するワイン

新潟市の海岸沿いは、春から秋にかけての降水量が少なく、夏は暑く日照時間が長い。冬は積雪が少なく氷点下の寒さになることはあまりない。また、信濃川が運んだ土砂が海底に堆積し隆起してできた平野で水捌けがよく、「フェルミエ」周辺はワイン用ぶどう栽培に適した条件がそろっていると言う。

また、日本で醸造・販売されているワインのほとんどが、出荷できない食用ぶどうや輸入濃縮果汁などを原料としている。

「本物のワインは少量でも、生産者がワイン専用のぶどうを栽培し、ワインに込めた想いをぶどうに注ぎ、その土地の中で表現される『個性』を味わっていただくものだ。

現在、年間1万本のワインを生産し、そのうち自社ぶどうで醸造されるのは2,000本。少しずつ自社ぶどうでの生産を増やしていきたい。新潟のテロワールを表現するワインづくりを地道に行い、新潟に根付く本物のワインをつくりたい」という想いは、オープン当時から少しも揺るぐことなく貫かれている。



1. オレンジ色の屋根と季節の草花が植えられた庭が親しみやすい  
ワイナリーフェルミエ
2. 「良いワインをつくれれば必ず求められるようになる」と語る本多さん
3. 丘陵地に広がるぶどう畑

栽培するぶどうは、新潟の料理とワインの「マリアージュ」を目指し、スペインガリシア地方で“海のワイン”と謳われる「アルバリーニョ」という品種に特に力を入れている。新潟と同じ海岸部にあるガリシア地方で魚介類と合わせて飲まれており、新潟の海の幸と相性が良いと考えるからだ。

「新潟に来たら新鮮な魚と日本酒を楽しむのがまだ一般的だが、新潟のワインで新潟の海の幸を堪能してもらおうのが夢だ」という。

数年前に行われた新潟の鮭とフェルミエのワインを楽しむ催しでは、参加者から「今までにない試みに話が弾んだ」との感想があり、以後、新潟市古町にある「すし屋」にはフェルミエのワインが常設されている。

\*テロワール：「土地」を意味するフランス語。ワインの品種における生育地の地理、地勢、気候による特徴をさす。

## ■ ワイナリーに人が集う

「今の若い人たちは、高ければ良い物だという価値観ではない。安くても良い物があることを知っている。彼らは、土地の個性を表現するワインの本質を理解している。

新潟は食材の宝庫であるにも関わらず、ワインの文化は醸成されていない。今後、本物の良い新潟のワインができれば浸透する可能性がある」と新潟のワインファンがこれから増えていくだろうと期待している。

本多さんに将来のワイナリーについて尋ねると、「今はまず本物の良いワインをつくるのが全てだと思う」と角田山の麓に広がる広大な敷地をさし、真剣に本物のワインをつくりたいという人が増えていると言い、同じ意思を持った人たちが、この地でぶどうを栽培できるスペースはまだ十分あり、ヨーロッパでよく見られるような、ぶどう畑の区画毎に生産者が違い、同じ畑でも違った味のワインが楽しめるような

ワイナリー集積地が変わっていきける可能性がある」と微笑んだ。

「フェルミエ」に続き、「ワイナリー経営塾」卒業生のワイナリーが2軒オープンし、4軒のワイナリーでワイン専用ぶどうのみを栽培する「ヒビアルの会」がつくられ、砂質性のテロワールで醸造されたワインを飲み比べられる環境も整ってきた。共同で制作したガイドマップ「ワイン村散歩」もこの秋から配布される。

広大な丘陵地に広がるぶどう畑を縫ってワイナリーを巡り、この土地の食と文化をワインとともに味わう人が「集う」そんな新しい新潟の風景がごく自然になる日も近いだろう。

教えていただいた場所へ行くと、「カーブドッチ」のぶどう畑の隣に、本多さんが今年から栽培しているテロワールを如実に反映するといわれる品種“ピノ・ノワール”が植えられていた。

本物の地域づくりは、優劣を競うのではなく、地域それぞれの個性をその土地の住民が育て熟成させ、地域の風景、文化などの違いが訪れる人を感動させる。まさにワインづくりと同じだと思った。

新潟の土地でつくられた本物のワインは、作り手の想いをしっかりと受けとめ、新潟の魅力を世界に発信する最高のプレゼンターとなるだろう。



ワイナリーに併設されたフレンチレストランでは、新潟の食材でつくられた料理とワインが楽しめる

取材協力：「Fermier」フェルミエ

新潟県新潟市西蒲区越前浜 4501  
TEL:0256-70-2646 FAX:0256-70-2647  
ホームページ <http://fermier.jp/>

## 先人の知恵から生まれた富山の昆布メ

江戸時代、富山湾で捕れる新鮮な魚をそのまま保存し食べられるよう考えられた「昆布メ」。

昆布の旨みが魚をよりおいしくする昆布メは、時代を超え、富山を代表する郷土料理として受け継がれている。



繊細な素材の旨味が失われないよう、白エビの昆布メにはおぼろ昆布が使われる。

### ■ 「北前船」で運ばれた昆布

昆布が全国各地に運ばれるようになったのは、海上交通がさかんになった江戸時代、北前船が発達してからと言われている。

「北前船」は、大阪から瀬戸内海を抜け、日本海沿岸各地を経て北海道に至る航路で、北海道で採れた昆布、鰯などの海産物が運ばれ、富山からは米、酒などが積み込まれた。

北前航路は「昆布ロード」とも言われ、大阪の「佃煮」、京都の「千枚漬」、福井の「とろろ昆布」、富山の「昆布メ」、「昆布巻かまぼこ」、「ニシンの昆布巻き」など、昆布が運ばれた土地で特徴ある料理や食べ方が生まれた。

昆布の一部は沖縄を通して中国へ渡り、中国から逆ルートで富山に麝香などの漢方薬の原料が運ばれ、これが富山の売薬につながっていったと言われている。

### ■ 浸透現象で絶妙な味を熟成

昆布メの専門店かねみつに勤務し、富山県の「食の語り部」でもある牧野俊郎さんによると、「昆布メは浸透現象で刺身の余分な水分を昆布

が吸い取り身が締まり、刺身に昆布の旨味成分と塩分がほどよくなじみ絶妙な味となる。

一晩たつと昆布と刺身の間にアルギン酸という昆布に含まれる糖質の糸が引き、食べ頃になる。肉質の柔らかい魚は、そのまま刺身で食べるより、水分がとれて弾力性が増し、よりおいしくなる」。

「魚をすき間なく均等に並べ、昆布で上下から挟み、重石をするしめ方は『サンドイッチ製法』といい、昆布メを量産する為に、昭和40年代に考案された」そうだ。



昆布メへの思いを話す牧野俊郎さん

富山で昆布〆と言えばサス（黒カジキ）で、スーパーにも多く出回り、まさに食卓の定番になっている。他に富山湾で捕れるシロエビ、ホタルイカなどがあるが、贈答用やおみやげ用として購入されることが多い。

「昆布〆にすると、おいしさが上乘せされるうえに、刺身を数日もたせることができるので、夕飯で残った刺身を昆布〆にして翌日の夕飯で食べる。捕れすぎた魚を昆布〆にして売る」など先人の知恵が詰まった料理だと強調する。



富山で一番食べられる黒かじきの昆布〆

### ■ 年間の消費支出金額は日本一

昆布〆の他にも富山では、昆布あめ、とろろ巻などの昆布食品が食べられ、コンビニには「とろろ昆布」のおにぎりが売られているなど、昆布が食生活に溶け込み、食べられており、昆布の卸加工会社が何軒もある。

扱われる昆布も、羅臼昆布、真昆布、利尻昆布、日高昆布、長昆布など種類が多い。産地それぞれに持ち味があり、昆布〆には長くて幅がある真昆布が使われる。

昆布問屋は、9月下旬から北海道へ仕入れに行き、昆布がおいしくなると言われている10月頃から店頭で新物が並び始める。

ここまで、富山に昆布の食文化が定着したのは、明治以降、北海道の昆布の産地、羅臼、知床に入植して昆布漁に従事した人々が、富山にいる家族や親戚に昆布を送り、昆布に馴染む機会が多かったことも影響しているのではとも言われている。

総務省の2010年の家計調査によると、富山市の1世帯当たりの昆布の年間消費支出金額の平均は2,345円と全国で1位、全国2位の京都市の1,691円、全国平均の1,084円を大きく上回っている。

### ■ 昆布〆文化の継承と未来

最近、若者が昆布〆を食べる頻度が減っているという調査結果もあり、富山商工会議所は「とやま昆布〆研究会」を発足させ、現在は県内で昆布〆を提供する飲食店をホームページで紹介するなど、昆布〆の広報に努めている。

海岸部の魚介の昆布〆だけでなく、山間部の家庭でのみ食されてきた「山菜昆布〆」も販売されるようになり、おみやげとして人気があるそうだ。

さらに、氷見牛、飛騨地鶏の昆布〆も誕生し、平成の昆布〆文化が花開いている。

昆布はビタミンB1、ビタミンB2、食物繊維やカルシウム、マグネシウムなどが豊富だ。また昆布に含まれているアルギン酸は、頭の回転を良くし、フコイダンという成分は細胞をよみがえらす効果があり、がんの増殖を抑制すると言われている。

「太平洋側の都市で開催される物産展に出展すると、初めて見たというお客様が多い。しかし、一度食べるとファンになり毎回足を運んでくださる方も多い」と昆布〆の魅力に牧野さんは自信をのぞかせた。

富山の生活の中で生まれ「きときと」の魚を始め多様な食材の魅力を新たに引き出す「昆布〆」。北陸新幹線が2015年春開通すれば、かならず訪れる人々の味覚をそそる一品となり、全国ブランドへと発展して、新しい物語ができていくだろう。

取材協力：(株)かねみつ

富山県魚津市大光寺 1350

TEL:0765-24-3433

ホームページ：<http://kobujime.shop-pro.jp/>

参考資料：「商工とやま」

# 伝言板

(一社)北陸地域づくり協会が共催、協賛、後援等で行う一般参加型事業です。  
お時間をみつけ、ぜひお立寄りください。

イベント名	期日	開催地・会場	内容	問合せ先
けんせつフェア 北陸 in 金沢	10月18日(金) 9:30～17:00 10月19日(土) 9:00～16:00	金沢市 石川県産業展示館	民間企業、学校(大学等)研究機関の新技术・新工法等の紹介展示、民間企業の建設機械等の展示、官公庁の事業の紹介等	北陸地方整備局 北陸技術事務所 TEL:025-231-1281
第20回 大里峠越交流会	10月20日(日)	新潟・山形県を結ぶ 旧越後米沢街道十三 峠の一つ「大里峠」	旧街道を歩き往時を偲び、周辺の豊かな自然環境や歴史とふれあう。大里鍋を囲んでの交流会	大里峠越え交流実行委員会(関川村役場 建設環境課内) TEL:0254-64-1479
信濃川 大河津分水 写真コンテスト	応募締切 10月21日(月) 審査発表 11月初旬予定	表彰式 12月初旬 長岡市	母なる大地越後平野に恵みをもたらす信濃川を題材に川と人の関わり、暮らしをテーマとした写真を募集	北陸地方整備局 信濃川河川事務所 総務課 TEL:0258-32-3020
大河津分水講演会 2013	10月27日(日) 14:30～16:50	新潟市 新潟日報社 メディアシップ 2F 日報ホール	講演「東日本大震災、近年の豪雨災害の教訓に学ぶ」 講師:関 克己(京都大学経営管理大学院客員教授/元国土交通省水管理国土保全局長)	NPO 法人信濃川大河津資料館友の会 斉藤:090-1996-1256 FAX:0256-97-3682
平成25年度 北陸河川技術研修 (受講費:5000円) 10月15日申込締切	11月7日(木) 13:00～17:15 11月8日(金) 10:00～16:30	新潟市 新潟県自治会館 1F 講堂	【7日】講話①「安全を持続的に確保するための今後の河川管理のあり方」 講師:関 克己(京都大学客員教授) 講話②「地域から求められる、地域と連携した河川管理・危機管理」 講師:國定 勇人(三条市長) 【8日】特別講演「最近の国土交通行政」 講師:佐藤 直良(日本大学客員教授) ほか2講演	(公社)日本河川協会 佐藤 TEL:03-3238-9771 FAX:03-3288-2426 E-mail: hokurikukuen-sanka@ japanriver.or.jp
第1回 北陸橋梁保全会議 (参加費:4000円)	11月11日(月) 13:00～17:45 11月12日(火) 8:30～12:00	新潟市 新潟グランドホテル	■基調講演 11日:13:20～14:50 「道路橋の維持管理について」 講師:西川 和廣((一財)橋梁調査会 専務理事) ■報文発表 11日:15:00～17:45 12日:8:30～9:30 ■パネルディスカッション 12日:9:45～11:45 テーマ:「橋梁の長寿命化について」 座長:丸山 久一(長岡技術科学大学 環境・建設系教授)	北陸地方整備局 道路部 道路管理課 『北陸橋梁保全会議 事務局』 北村・会田・池田 TEL:025-370-6744 FAX:025-280-8917 E-mail: doukan@hrr.mlit.go.jp

## 編集後記

気象庁運用開始初の「特別警報」が出され、嵐山・渡月橋の橋脚が見えなくなる高さまで濁流が押し寄せ、映像に目を疑い見入った方も多いのではないのでしょうか。常願寺川は、出水なきを常に願うという住民の気持ちをこめて次第に「常願寺川」と呼ばれるようになったとも言われています。もし立山カルデラで砂防事業が行われていなければ、富山はたびたび「特別警報」が出され、大きな災害に見舞われていたかもしれないと、改めて立山砂防を支える人々の気概に敬服しました。秋の夜長、新潟のワインと富山の「昆布漬」を友と味わい、北陸の食の豊かさ、奥深さを語り合い、何とも言えない幸せな気持ちになりました。(事務局)

## 地域づくり in ほくりく 第2号

発行 平成25年10月3日  
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会  
〒950-0197  
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号  
電話 (025) 381-1160  
FAX (025) 383-1205  
HP: http://www2.hokurikutei.or.jp